

令和4年4月15日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080005

氏名 佐藤 広大

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 _____ (国名 シンガポール _____)
2. 研究課題名（和文）： _____ ヒューム主義を用いた意図の知覚説の補完と進展 _____
3. 派遣期間：令和4年1月10日～令和4年4月9日（90日間） _____
4. 派遣先機関名・部局名： _____ シンガポール国立大学・哲学科 _____
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2ページ程度を目安に記入すること）

行為とは何かということは、古くから問題になってきた。たとえば、私が文字を入力していることは、私の行為だろうか。もし行為だとしたら、どのような条件が満たされているのだろうか。

この問いに対して、ヒューム主義は、欲求と信念によって引き起こされているものが行為だと答える。たとえば、〈報告書を完成させたいという欲求〉と〈文字を入力すれば報告書が完成するという信念〉によって引き起こされているなら、それは行為である。

本派遣では、このヒューム主義を使って、私がこれまで展開してきた意図の知覚説を補完しさらに進展させることを目標とした。意図の知覚説では、世界の見え方の一種である意図によって引き起こされているものが行為である。

派遣期間中には、ヒューム主義の中心的な擁護者の一人であるシンガポール国立大学のニール・シンハバブ准教授と、私の原稿について議論を重ねた。その原稿で、私は、ヒューム主義を使って意図の知覚説を補完し進展させることを目指した。議論の際に、シンハバブ准教授は、原稿のアイデアをより明確化するために、原稿と関連する論文や書籍を紹介したり、構想中の自分自身のアイデアを披露したり、私とは異なる観点から私のアイデアを擁護したり反論したりしてくれた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究で明らかにしたのは、次の二つのことである。

第一に、哲学的な議論が取り扱うべきなのは、単なる言葉遣いの問題ではなく、存在論の問題だということである。つまり、哲学的な議論が取り扱うべきなのは、すでに切り分けられている心的状態をどの語（たとえば、「欲求」や「信念」や「意図」という語）を使って呼ぶかという問題ではなく、まだ切り分けられていない心的状態をどのように切り分けていくかという問題であると考えられるようになった。

第二に、オッカムの剃刀を乱用してはならないということである。オッカムの剃刀とは、指定する存在者の数はできるだけ少なくすべきだという原理である。オッカムの剃刀は、信念と欲求だけを指定するヒューム主義の利点を説明する。しかし、存在者の数が少ないことだけでなく、それらの存在者のみで被説明項のすべてを自然に説明できることも重要であると考えられるようになった。

現在、これらの成果をまとめた論文を執筆しており、国際誌に投稿する予定である。その後は、投稿した論文を踏まえて、意図に関する博士論文を執筆していく。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムを通じて、次の三つのことを得ることができた。

第一に、自分の研究の方向性は間違っていなかったという確信を得ることができた。派遣期間中、シンガポールの複数の哲学研究者と、ヒューム主義を使って意図の知覚説を補完し進展させるという私の研究について議論する機会を得ることができた。その際に、シンガポールの哲学研究者たちは、私の研究のアイデアに完全に説得されるとはかぎらなかったが、理解可能であることは認めてくれた。自分の研究が日本語だけでなく英語でも理解可能なものになっていると感じた。

第二に、シンガポールの哲学研究者たちと人的なネットワークを構築することができた。派遣期間中は、受入研究者であるシンハバブ准教授やその指導を受けている大学院生を中心に複数の哲学研究者と会い、議論することができた。そのうち数名の大学院生とは、定期的に連絡を取り合うようになり、お互いの国で講演する計画や共同研究する計画を立て始めている。

第三に、日本とは異なる文化に直接触れることができた。たとえば、シンガポールでは、スマートフォンを持っている前提で様々な制度が設計されていたり、店でお釣りがなくなることがあったり、食べるときに器を持つことはマナー違反であったりした。また、ごみをポイ捨てはしてはならないなどの様々な厳しい罰則や罰金が定められていた。大学では、自分の考えを自分の言葉で明確に語り、議論することに重きが置かれていた。ある程度まとまった期間滞在することで、こうした文化を直接体験することができ、日本の文化について考え直すきっかけにもなった。